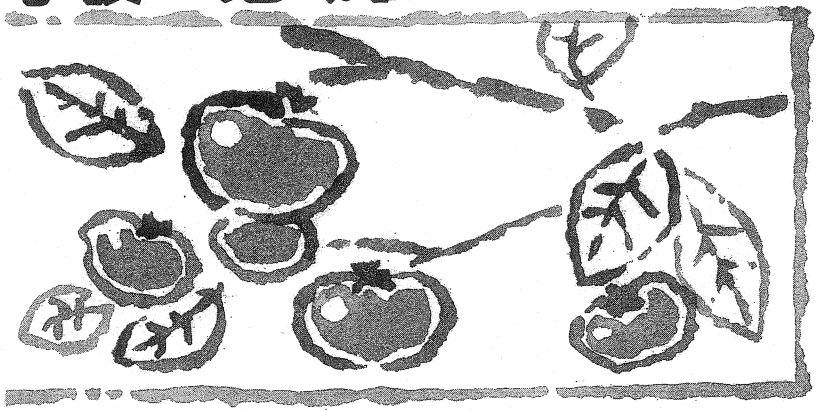
学校　地域社会



文部時報

昭和六十三年九月
第一三四〇号

特集　国民文化祭

◇グラビア
目でみる国民文化祭

◇巻頭論文
エリートの文化と国民の文化……三浦　朱門…8

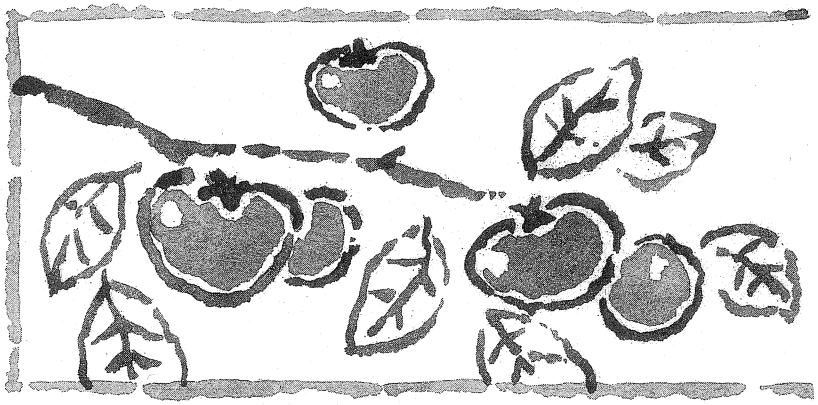
◇座談会
地域文化の振興と国民文化祭……12
（出席者）倉橋　健／石井　歡
小林　武雄／（司会）渡辺　通弘

◇エッセイ集
「文化の振興」……27
米山　俊直／天谷　直弘／上山　春平／河北　倫明／和田　隆男
小池美代子／堯　律子／松枝　忠信／ドナルド・キーン
クロード・チアリ／長尾　裕隆／稲垣美穂子／ジェームス三木
大島　渚／芳賀　徹／栗原　一登

◇解説
第三回国民文化祭ひょうご88の概要と特色
……第三回国民文化祭兵庫県実行委員会…44

◇国民文化祭Q&A
……文化庁国民文化祭担当官室…53

手をつなごう　家庭



◇資料
1　来年は埼玉で開催
第四回国民文化祭さいたま89実施計画大綱案まとまる
……埼玉県県民部国民文化祭推進室…55
2　架けよう―文化の橋・交流の橋
第五回国民文化祭・愛媛90……愛媛県生活文化局国民文化祭準備室…62

☆特別記事
よみがえった重要文化財「明治丸」……内海　博…91

○教育改革トピックス
高等学校教育の個性化等の推進に関する調査研究協力者会議が発足
……初等中等教育局高等学校課…68
教員の週休二日制・学校週五日制に関する省内連絡会議を設置……教育助成局地方課…69
文教施設のインテリジェント化に関する調査研究協力者会議が発足
……大臣官房文教施設部指導課…70
大学入試センター試験と入試改革……高等教育局大学課大学入試室…71
生涯学習の振興に関する研究協議が発足……生涯学習局生涯学習振興課…72
道徳教育用補助教材（副読本）に関する調査研究を開始
……初等中等教育局小学校課・中学校課…73

◎文部省のまど
基礎研究の推進を基調に地震・火山噴火予知計画の推進を
学術国際局学術課…74
「婦人国際交流フェスティバル」の概要
生涯学習局婦人教育課…78
昭和六三年度学校基本調査結果（速報）の概要
大臣官房調査統計企画課…80
昭和六一年度学校教員統計調査結果の概要
大臣官房調査統計企画課…87

◎文化財紹介
重要文化財　明治丸

◎名作シリーズ
国宝　虚空蔵菩薩像　一幅
解説　中野　照男…67

表紙　太田　英一／カット　内部　敬生

座談会

地域文化の振興と国民文化祭

〝国民文化祭〟とは

渡辺（司会）本日は、先生方に「地域文化の振興と国民文化祭」というテーマで座談会をお願いしております。国民文化祭は昭和六一年から、国民の方々に全国的な規模で文化活動を発表する場を提供するということを主な目的として、開始されたものです。

この背景には、国民の間において、単に受け身で文化を享受するのではなく、自ら文化に参加し、創造活動を行いたいという意欲が高まっている状況があって、それにこたえる形で、この事業が打ち出されたわけでございます。

この一〇月に兵庫県で開催されるものが第三回目に当たりますが、まだ二回しか開催していないにもかかわらず、参加人員も毎年増えております。開催は持ち回りでやっていただいて、昨年は熊本県、ことしは兵庫県ということですが、県が非常に熱心に、しかも意欲的にお進めいただいている結果、事業の内容も充実し幅も広がっております。

本日はこういった国民文化祭の盛り上がりを背景にして、それが地域文化の振興にどのようにかかわっていくべきか、また、国民文化祭自体が今後、どのような姿で伸びるべきなのかという将来構想も含めて、先生方から、いろいろご意見をお伺いしたいと思うわけです。

もう一つ、始めに申し上げたいと思いますのは、国民一般の方々に、全国的な規模で文化活動を発表する場を提供するという当初の目的は十分に達しているわけですが、これに加えまして国民文化祭の動きとして、特色ある地域の文化の発表の場、あるいは競い合いの場というように、私どもが考えた以上に事業の幅の広がりをみております。

そこでこれらの点も踏まえ、本来あるべき国民文化祭の姿ということについて、まず先生方のご意見なりお考えをお伺いできればと思うわけでございます。

倉橋先生には、この事業誕生の時から企画委員会委員長としてご指導いただいているわけでございます。そういった意味では、この国民文化祭の動きについて一番熟知されているわけですが、国民文化祭の意義とは一体何なんだろうかという根本のところから、まず口火を切っていただきたいと思います。

倉橋　実は、第一回目のときは果たしていつまで長持ちするかというようなことを危惧してたんです。こういうものは回を重ねるにしたがって固まっていくか、あるいは尻すぼみになるか、どっちかだと思うんです。この文化祭の場合は非常にいい意味で固まってきた。固まってきた理由は何かといいますと、第一回目のときは準備期間も少なかったのでとにかく東京で実施するのだということが主な目標だったのが、熊本や兵庫になってきますと、準備期間も前年から始まっているということ。それから、全県的に参加して特色ある文化祭にしていこうという、それぞれの県の意欲がいろいろな形で実を結んできているというのが、いまの状態じゃないかと思います。

今後もそれぞれの開催県で特色ある文化祭をつくるというご努力をお続けになっているうちに、さらに底辺も広がるでしょうし、参加団体もその県だけではなく全国規模にもっと広がるでしょうし、そこで自分たちの文化というものを共通の生活的基盤に即して考える、また実践するという動きが自ずと生まれてくるのではないか。そういうふうにすすめていくのが一番望ましい形だと考えております。

文化の担い手は大衆

渡辺　石井先生は、日本のアマチュア文化活動の中では最も歴史の古いものの

出席者（敬称略・発言順）

倉橋　健（早稲田大学教授）

石井　歡（全日本合唱連盟理事長）

小林武雄（第三回国民文化祭兵庫県実行委員会副会長・芸術文化団体「半どんの会」代表）

〈司会〉

渡辺通弘（文化庁文化部文化普及課長）

一つである合唱運動を指導されておいでですが、そういった立場から、国民文化祭が発足したときに先生がお持ちになった期待とか、あるいはその期待に対して、今どのように動いているか。国民文化祭の意義をからめていろいろお教えいただければと思います。

石井　まず基本的に申しまして、国民文化祭とは素晴らしいことを始めたなと思っております。と申しますのは、いわゆる文化というものを広く考えますと、その担い手がどちらかというと専門化してきた傾向があるんですね。しかしよく考えてみると、文化の担い手は大衆なんですね。

ところが表面的にみると、いわゆる専門家だけが支えているようにみえる昨今であったわけです。歴史的にみると三百年ぐらい前までは、音楽について言っても作曲から演奏まですべて素人がやってお互いに楽しんでいたんです。それが演奏技術が非常に高いものを要求されるようになって専門家が出てきた。しかし、このごろではアマチュアの人たちでも相当高度なことができるような世の中になってきた。もちろん、専門家でなくては絶対にできない面もあります。しかし、相当の部分は大衆すなわちアマチュアでもできるんですね。そういったときに多くの人に自分たちでもやってみようという場を提供するということは絶対必要なことなんです。提供すればするほど、それが深く広くなっていくと思います。そういった意味で私はこういった催しはとても大切なことであって、これからも大いに広がっていかなくてはいけないと思っております。

渡辺　この事業を提唱された当時の文化庁長官の三浦朱門先生も常々おっしゃっていることですが、芸術・文化というのは国民大衆のものであるべきだ。そういう観点から今まで文化庁がやっておりました芸術祭のように専門の芸術家のための祭典だけではなくて、すべての人々が参加できる文化の祭典をやるべきではないかということから、この国民文化祭が考えられたと私どもも理解しております。

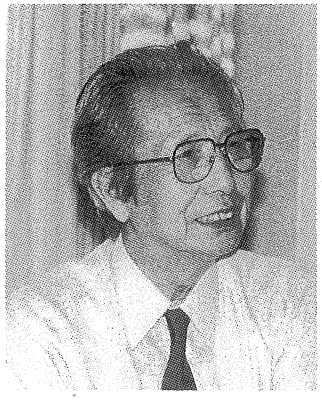
国民文化祭を地域から見る

渡辺　小林先生は、兵庫県で文化団体である「半どんの会」というものをお作りになって、常々、地域文化の培養土作りということをテーマとして、活躍をされておられると伺っております。そういった地域に根付いた文化活動をされているお立場から、国民文化祭をどのようにとらえていただいているのか、お教えいただけるとありがたいと思います。

小林　文化庁が地方文化振興会議というものを設けて、各地方を回られましたね。その時に神戸には文化がないということであれば、大衆のわれわれが寄って文化をつくろうではないかと申し上げたのです。また、前々から地域がやせているというので、大衆による新しい文化をつくろうではないかというので、「半どんの会」を作りました。この会はわずか五〇人余りで始まったのですが、今は二〇〇〇人を超える人たちが参加しております。

いま私たちは神戸の若い芸術家たちと一緒に活動しているんですが、この人たちは、「国民」という言葉を、どこからか押し付けられ、統一された文化祭というふうには受け取っていない。われわれは国民文化祭というものを、文化庁から押し付けられたという考えは持っていないわけです。われわれがやっている仕事で、文化を広めるということが一番大事であるのなら、官公庁から、「こういうことをやろうやないか」という申し出があれば、「ありがとう」と言うて一緒になってやる。それが新しい民主主義の文化の基本ではないか。国民文化祭を持ってきていただいた折に、これはチャンスやなというふうに私自身は考えたんです。

いま一つはアマチュア文化ということについてですが、文学でいいますと、私は詩を書くんですけれど、短歌、俳句など、誰でも書けるわけですね。どこからどこまでがアマチュアで、どこからどこまでがプロだということになると、境界が非常につけにくい。しかし、その目的とする理念は大衆文化である。大衆の皆さんを豊かにして地域社会の福祉をも実らそうやないか。そういう考えだろうと思うんです。



小林　武雄氏

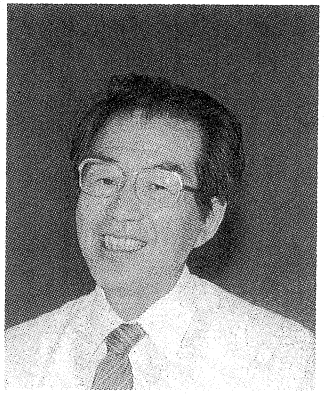
芸術文化というと何か専門的、職業的な人だけがやってるみたいにとられる。しかし、一番大事なことは地域の皆さんの文化のレベルを豊かにしていこうということですね。アマチュアという言葉は非常に定義が難しい言葉ですけれども、みんなが一諸に楽しむ。そういう人たちが寄り集まって新しい芸術文化をつくるという意味で、しかも国が場を提供してやろうというんやから、国民文化祭は持っていきようによっては地域文化に大きな刺激になるのやないかという期待を持ってます。現に皆一生懸命になってやっておられますから、大変いい場を与えてもらったと思って喜んでおるわけです。

渡辺　文化庁の全体的な方針といたしましては、国内においては、できるだけ地域を主体とした多様な文化を育てるべきであり、もしこの国民文化祭が、そういった多様な文化を育てる地域の文化の振興とつながれば、非常に望ましいのではないかと思っているわけでございま

す。それがまた、文化全体の大衆化、あるいは統一された行政主導ではない住民生活に密着した文化を育てる、ということにつながるんじゃないかと思います。

地域文化への貢献

倉橋　例えば演劇と音楽の交流というようなことから考えますと、その地方に伝わっている民話のようなものを基にして、創作活動をなさる方がそれぞれの県なり地方なりにいらっしゃると思います。そういう方が脚本を書き作詞をし、いろいろ相談し合ったりアドバイスを受けたりして、曲をつけてオペラやミュージカルにしていくというようなことも、今後考えられるのではないかと思いますね。そうしますとエキシビション（展示）でない創作活動が、地域を基にして多次元的なかたちで実現する可能性が出てくると思います。



倉橋　健氏

小林　実は、民話と音楽を合わせたりするようなことは、すでに各県を超えて交流があるわけです。そこへ国民文化祭というものを持ってきたから、なおさら国民文化祭に対する関心が、高まったと思うんです。そういうものを励ます場としては民間の企業なども、美術館や場所をこしらえたり、美術・音楽・文芸等に対する応援をしたり、いろいろしておられるわけです。

例えば、神戸ですと三洋電機の井植さんがお金を出して井植文化賞というものを作っておられます。その他、地方は地方なりで小さなドッキングを行いながらきているわけです。そこへ国民文化祭という肩書を付けると、一層の重みが出てくる。できたら県や国や市のお世話にならずに自分たちの力でやろうやないかというのが、「半どんの会」の本当の精神なんで、国からものをもらってやろうということになると、私の会では拒否する人もいるわけです。しかし、みんなが行くのやから一緒に行こうということでやってきました。それが一番大事なことなんです。少し意外に思うくらい兵庫県の場合は、それぞれ一緒になって各都市の特色を出しております。龍野というところは童謡の三木露風の出身地ですけれども、全国から募集して作曲をするとか、そういうことも国民文化祭やからできるんでね。龍野だけでやったって、なかなか広まりません。小さな市でできないことに、この国民文化祭は新しい意味を与えている。その貢献度はなかなか大きいもんやと思うて感心してるんです。

求められる地域性の発揮

渡辺　いま文化における国の役割の本質にもお触れになったわけですが、もちろん文化というものは国がつくったり内容を決めたりするものではなく、住民の方々、また住民に一番密着した形で行政を行っている地方公共団体、そういったレベルが主体になって動かしていただくものだと思います。国の役割は今、小林先生がおっしゃいましたように、ある意味では全体にまとまりを与えるという媒体的なものではないか。従って国民文化祭も国は内容については、余り触れることなく、それぞれの都道府県なり民間の文化団体にお任せしているわけです。

石井先生は全国団体の立場から、地域の文化活動と全国的文化活動の関係についてご経験があると思いますが。

石井　国民文化祭はなぜ各県で順番にやるかということの意義ですね。もう少し地域文化に近づいてもいいんじゃないかという気が、私個人はしているんです。全国規模の事業ですから、全国の人たちがいろいろ関係を持つということは絶対必要だと思います。私の申し上げるのはパーセンテージの問題で、例えば、半分ぐらいは地域の文化の表現の場であってもいいんじゃないか。あとの半分は全国的なものをやる。もっと極端にいえば三分の二は地域のものをやって、残りで全国的なものをやる。それくらいにしないと熊本でやったり兵庫でやったり、あちこちでやることの意味が希薄になるんじゃないかという感じがします。これはやはり、二回の経験を踏んだことによっての一つの反省みたいなものだと思うんです。

そうしますといわゆる地域性が出てきて、種目も相当変わってくると思うんです。それによって興味がわく。だから、全国からも人が集まるということになって、いいような気がしております。

小林　東京は中央ですから、急に開催しようとしてもちゃんとしたものができますけども、地方ではそんなわけにはいかない。熊本を見ますと、第二回目だから準備も大変やったと思うんですが、あれは熊本の人にとっては熊本県民祭というてもいいくらいの自覚とイメージを持って準備されたと思うんです。そこで今年兵庫県で開くに当たっては、地域を支えにして、もっと高度なものが出来ないかということを考えました。そのためには、専門家の方にも参加していただく。それから、同じするなら各県から作品を頂載し、優れたものを並べようやないかということで、地元が多いけれども、各県から頂載して交流を高めていくことを大切に考えています。兵庫県というのは、短歌、俳句、書道、華道などの組織は一応統一されている。県が統一したわけやないですけど、みんな寄ってくるようになってきたわけですね。だから、

今、兵庫県は、これまで一応大衆文化というものの層ができていた。その上に立って国民文化祭に参加して更に発展しようということが、実はわれわれの中にあるんです。それだけに熊本県を見てこうだった。その次、埼玉でやったらどうだろうかとか、そういうことも皆それぞれ考えながら、やっているわけです。

全国的組織の協力を得て

渡辺　これまでの開催県や開催が内定した県の構想を聞きますと、先ほど石井先生がおっしゃったようないわゆる地域性を前面に立てた国民文化祭という方向に動いていることは事実だと思うんです。

ただ地域性だけが強調されると拡大された県の文化祭になってしまい、全国民を対象とするという本来の趣旨と違ったものになってしまうんじゃないかという心配もあります。そういった意味では全国性や水準の高さと地域性について、今後どのように調和を取っていったらいいのかが、一つの大きな課題だと思います。

倉橋　水準の高さというのが、なかなか問題でしてねえ。

石井　それは時間がある程度解決してくれるものではないでしょうか。

倉橋　例えば演劇の場合はアマチュア性を非常に強調していますよね。音楽の場合、アマチュア的にショパンやベートーベンを弾くなんていうことはありません。（笑い）ところがアマチュア演劇の場合は、アマチュアらしい素直さだとか清潔さとかが強調される。高校野球と同じですね。詩の場合は詩作を本業として食べておられる方は少ない。何かほかに仕事を持ちながら詩を書いている。これでもプロはプロなんで、その場合、何を標準にして作品の良し悪しを決めるかというと、結局作品の出来だけなんですが、これまた非常に主観的なものが入りますね。ですから、回を重ねていって具体的にこうしたらどうかという意見が開催県でいろいろ出て、それの具体化の可能性を打診してみるとか、疑問の点を相談しながら進めるほかないと思いますね。

石井　現実にはまだ三回ですからね。その方向がいい方向に行っているかどうかということが問題だと思うんですよ。私はとてもいい方向に行っていると思います。

私は、合唱連盟にいささか関係しておりますが、全国組織を活用して各都道府県持ち回りのこの事業を大きく促進していくということは、大いに可能です。音楽だけについていえば、現に吹奏楽も合唱もオーケストラも非常によくやっていると思います。

県は何十年の間に一遍しかないかもしれない。ところが文化団体は毎年お手伝いをさせていただいてますので、国民文化祭の姿が相当わかっているわけです。

ですから、県と全国団体との関係がうまくいっている場合には、とても効果的なことができるんです。しかも年次、年次の積み重ねができるわけです。今、文化庁はアマチュア団体を活用するという方法をお取りになっていますが、私はこれはとてもいい方法だと思っております。ただ一つ、ちょっと問題があるのは、全国的なアマチュア団体に所属しないで文化活動をやっている方たちもたくさんいるということを、まず考えなくてはいけませんね。合唱も吹奏楽もオーケストラもそうなんです。そういう人たちに対しては、各都道府県から推薦されるというような形で今はやっておりますね。これもうまくいっていると思います。

プロとアマに違いはあるか

渡辺　演劇活動では、アマチュアの果たす役割が大きいわけですが、国民文化祭とのからみで全国的なアマチュア演劇団体が、今まで果たしてこられた役割、また今後果たすべき役割について、何か倉橋先生のほうからご指摘いただけますか。

倉橋　アマチュア演劇は、戦後は一時期、学校でも職場でも盛んでしたけれど、このごろはあまりにもテレビその他の娯楽が多いせいか、正直いって大変低調になっている。低調になりつつある演劇のアマチュア活動を、逆に刺激するためにも、国民文化祭がきっかけになって将来にわたる活動を続けられるようになることが望ましいと思いますね。ことし兵庫県で、来年は埼玉県でやって、それだけに終わらず、それぞれの県でいろいろなアマチュアの芸術団体、文化団体を基盤にした文化祭が毎年小さな規模ながらも、行われるようになっていけば、一番いいんじゃないかと思っております。

石井　歡氏

渡辺　小林先生のように地域の文化に密着して活動をされておりますと、全国的な文化団体とはまた違った目でアマチュア活動をご覧になっていると思います。そういった立場からご覧になって地域の文化団体を今後どのように育て、また理解していくべきでしょうか。

小林　ご承知のように尼崎にピッコロシアターというものがございます。これは大変な仕事やと思うんです。そこの女性の館長さんが非常に熱心で、しかも毎日新聞におられた経験もあるので、演劇関係の方の応援が得やすい。県が演劇学校を設けたり、山崎正和先生のような方方にバックアップしていただいた。今ま

ではアマチュアは芸術祭に参加できず、文化祭に参加して地域の皆さんに自分たちの芝居を見せて回るという仕組みになっとったのですが、このアマチュア演劇の関係者が集まったのが兵庫県演劇協会なんです。ところがいわゆるプロの団体はこれに参加しないわけです。片一方はあくまでもアマチュア的なものの考え方、片一方は興業的なことを考えますからね。今度も中心はピッコロにやっていただいて、あちらこちらまいりますけれども、そういう場合にもプロフェッショナルに動いておる劇団はあまり協力をしない。こういう折に国民文化祭が、これらの団体にどういう刺激を与えるか。その人たちが別の組織でも作ってくれて両方合わせていくようなことになるとありがたいんですが、プロはあかんということやから当然アマばかりなんですけどね。演劇そのものを見ると内容はそんなにぼくは差があるとは思いません。こういう場合にはプロとアマとどう違うのかという問題があるわけです。

渡辺文化普及課長

渡辺　国民文化祭のガイドラインにおいては、プロの参加も国民の文化活動への参加を促進し、援助する観点からなされる場合には認める、ということが決まっているわけです。地域におけるプロの芸術活動は大変重要なことですので、この際、その観点について何かご指摘いただけましたら。

石井　私どもは、極端に言えばプロもアマも違いはない。いい作品か悪い作品かの違いがあるだけだと思っています。プロの参加は特に、私は地域によっては必要だと思うんです。専門家といっても本当に苦しい思いでやっておりますよね。完全な専門家は案外少ないんですね。そういう方たちにもこの場を利用して、そのときこそアマチュアとプロフェッショナルの人たちとが結合して、何かをやる場を作るということは、国民文化祭が終わったあとにも続いて、いい効果をもたらすのではないかと思うんです。そういうことがないと、なかなかできませんからね。国民文化祭でそれを結合させるというのは、とても必要なことだし将来にいい効果を及ぼすのではないでしょうか。

倉橋　プロというのをあんまり厳密に規定しないほうがいいと思います。

クロスオーバーな参加を

渡辺　この国民文化祭がアマチュア文化活動振興の刺激剤にならなければいけないということでございますが、どのような点に注意すれば、その目的を達成できるでしょうか。

石井　一つはさっき倉橋先生がおっしゃったように、分野をまたがって芸術活動をするということに関しては、非常にいいチャンスなんですね。音楽で申し上げますと、吹奏楽と合唱と一緒になるとかオーケストラと合唱が一緒になるとか、またはオーケストラと演劇とが一緒になってやるとか、いくらでも広がっていくわけなんですが、そういうことを意識的にやってもらうような雰囲気を作っていくということは、絶対必要なことだと思いますね。個々に行うアマチュア活動は全国で盛んですが、クロスオーバーというのか、みんなが一つになって何かをやるということが、経済的な面をはじめいろいろな意味でできないんです。それをこの場でできるようにするということは、大変に必要なことではないでしょうか。

倉橋　例えば、国民文化祭が終っても、その後、県が仲介役になってクロスオーバーの芸術をつくる方向に持っていくということが大事ではないかと思います。それから県や国の主催とか助成とかいうと一部に抵抗があるのは非常にわかるんですけれども、逆にいえばわれわれが払っている税金を還元してもらうと思えば、大いに積極的に参加して「もっと補助をよこせ」ぐらいのことが言えるのではないかと思いますね。

石井　われわれは国だとか県から強要されているとか全然思わないし、反対に大変失礼な言葉を使えば大いに利用というか活用して、「いいことをやろうじゃないか」と思うんですよね。われわれがもう一つ高い立場に立ってしまえばいいのではないか。大変失礼だけど、ぼくは遠慮することはないと思うんです。

渡辺　国民文化祭が本当に文化全般にわたったイベントになるためには、これまであまり関与をされなかった方々に今後この事業にご協力やご参加いただく必要があるかと思います。

小林　一つの例ですけれども、ご承知のように神戸祭りというのがあります。これは神戸市が中核になって日本では珍しく官公庁が中心になって企画したもので、商工会議所なども参加するわけです。

神戸祭りにはいろいろな人たちが入り、いろんなアイデアを持ってくるわけです。例えば、ヘアショーというのがありましてね。あれは全国どこにもなかったわけです。いろんな形の髪を考える、そういうアイデアはどうやというわけですね。そしたらそれええというのでやったんですが、それが東京でほんまもんになって全国に普及するとかね。二〇〇万人ぐらいの人が集まるわけです。京都からも参加してくる。やはり、そういう場があるからくると思うんです。今までは そういう場がなかったわけだから、国民文化祭でそれをやろうということであれ

ば、みんなが集まる。これは大事なことやないかと思うんですよ。

生涯学習の場としての国民文化祭

渡辺　それから、もう一つ重要な点は国民の間にありますいわゆる生涯学習への熱意だと思うんです。昨年、総理府を通じて私どもが行いました国民の世論調査によりますと、五分の一の方が、何らかの文化活動をしているという結果が出ております。さらに三分の一の方が、将来機会があれば何らかの文化活動をしたいと希望しているという数字が出ております。その方たちが本当に全部文化活動をしたとしたら、それこそ日本中、文化、文化ということになるわけで、大変結構なことなんですが、国民の間における文化の学習に対する関心がある以上、その発表の場としての国民文化祭は、いや応なしに今後とも国民の関心を集めるんじゃないかと楽観はしているわけでございます。

さらに生涯学習の内容を考えますと、スポーツも、社会教育もあるでしょうが、恐らく成人の方々の一番の関心は文学であれ何であれ文化活動ではないかと考えているわけです。そういった生涯学習の観点からみた文化活動、そして国民文化祭のあり方ということについて、何かお気付きの点ございましたらお願いします。

石井　生涯学習として考えられるのは、非常に知的なサイドのものと感覚的なサイドのものと二つあると思いますね。どっちかというと音楽だとか美術などは感覚的な世界のものですね。そこで知的なほうの面がもう少しあってもいいんじゃないだろうかと思います。文芸もそうかもしれませんし、そのほかいろんなものがあるんじゃないでしょうか。そういったものに対する関心を、もう少し持ってもいいかもしれませんね。

渡辺　その例として、文化に関するシンポジウムを全部で四本行います。国際文化シンポジウムをはじめ、街並み一〇〇mシンポジウム、ひょうご演劇シンポジウム、トーク・ナウ〝文化最前線〟ということで、かなりそちらのほうも兵庫県では力を入れております。ただ、全体のバランスからいうと少ないというご意見もあり得るかとは思います。

石井　それから、継続的に行えるようなものもあっていいですね。例えば、文化シンポジウムであるならば、国際文化に的を絞って毎年行う。そういうことも考えていいんじゃないでしょうかねえ。

倉橋　外国の場合だとコミュニティーというものが三百年、四百年の歴史を持っていて、住民がそれぞれ自分の持っている能力を出し合って芸術に参加する。それをまた市民の人たちが見て楽しむ。無償の活動で自分たちも喜びながら、余暇や年齢に応じて行ってるわけですよね。そういうことが生涯学習やボランティア活動につながっていくんでしょうが、日本の場合はコミュニティーはあるんだけど、ともすれば閉鎖的になりがちなんで、それを開いたコミュニティーにし、日常活動もずっと続けていくきっかけを国民文化祭が作れればいいと思います。

渡辺　ただ今のは大変重要なご指摘だと思うんです。国民文化祭はただ単に文化事業をやるだけじゃなくて、開かれたコミュニティーを作る、あるいはボランティア活動といったものに刺激を与えるというように、違った形での発展の仕方もあるということですね。

今ここでイベントとして、かなりの広がりと盛り上がりを見せている国民文化祭を言うならば点としてのイベント事業から、面としての文化振興なり地域振興にどうつなげていくのか、という大きな課題が残っているわけです。こういった観点から、ご意見ございましたら、よろしくお願いいたします。

点から面への展開を

倉橋　具体的にいえば継続性を持ったコミュニティー活動、文化活動ということを考えると、集団で創り上げることが必要で、またリハーサルの時間も必要な音楽部門あるいは演劇部門では、なかなか休暇が取れないということがありますね。これなどは雇い主や勤務個所において、「国民文化祭に出るんなら休みをとって大いに結構」というような雰囲気に持っていくように、国民文化祭の意味を理解してもらうよう努力するのも一つの方法じゃないかと思います。

渡辺　コミュニティーへの呼びかけだけではなくて、国民が参加しやすい条件を整えていくということですね。

小林　私は生涯学習ということで、最近これは勉強し直さないかんなと思うことがあるんです。それは高齢者のための文化なんです。県内でもよく話題になるんですけど、一〇年経ったら高齢者の層がこんなに厚くなる。ただし問題にしているのは大抵税金がどないなるとか、年金がもらえるとか、そんなことばっかりでしょう。もし三分の一が高齢者の層になり、力を持っており年金で食べておるなら、一番文化を築けるのはその人たちです。言うなら私たちですわ。

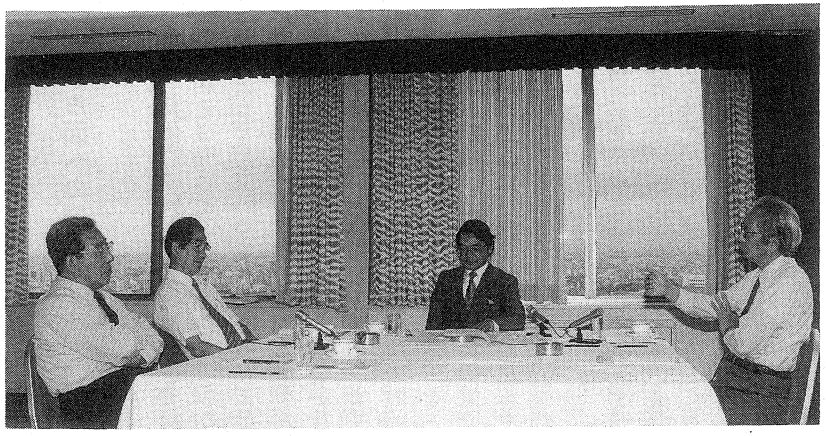
中央の文化庁あたりが、老人の文化が日本のこれからを支配するだろうという信念を持たないけませんわね。年取ったら何もすることないぞ。暇だから文化でもやれやれということでは、文化がかわいそうやと思うんです。高齢者の文化いうもんを生涯学習の中でどう形成していくか。文化庁が中核になって、そういうプランを立てていただいたら、皆さんも本当に楽しんでできる。

そこで心配なのは今やっている地域文化の振興というのが、よそを排斥するような形にちょっとなりつつある。あの人

は向こうの人や。姫路は姫路、神戸は神戸、西宮は西宮やというようなね。それはちょっとわれわれが考えてる地域振興と違うわけです。そういうことになるとせっかく国民文化祭をなさっても、地域の競合でなく対立するようなことになる。そうならんように、生涯学習の中でお互いに勉強していくようにしないといかんと思いますね。

それから、点の事業から面の事業へとならないかんと思うんです。その一つの方法として、芸術振興文化センターを作りたい。これはフランスのポンピドーセンターを見てきてみんながいっとるんですけどね。ポンピドーの構想より以上のものを作らんといかん、と。

国民文化祭を契機にして、せめて阪神間に大きなものを作れば、あらゆる芸術が集まる。もちろん劇場もあれば練習する所もある。そこへ行けばどんなことでもできるというような大きなものを作ってほしい。面というのは、そういう豊かな集会ができる場所を作ってやるということです。文化庁が国民文化祭に対して資金を出してくださった。それは点ですわね。同じように定着した面をこの際、兵庫県に作ると、兵庫県がその主体になるんじゃないか。



交流、そしてふれあい

石井　今の小林先生の話とちょっと違うことですけど、三日か四日、アマチュアの人たちが一堂に会する。簡単にいえば合宿して講習みたいなものをやって、そこで人間的な交流の場を持って、ある一つの芸術活動を行うという形でやるべきじゃないかと思うんですよ。今のはでき上がったものを、ただある人たちが聴いてるだけで終わってしまっていますね。そうじゃなくてその人たちも一緒に参加させたいわけです。そこにいる大衆の人たちが、一緒になって参加して芸術

を楽しむという方向に持っていくべきだと。美術だって三日か四日、一つの所に集まって偉い先生がいて指導しながらあるものをつくっていくという経験をさせる。それがフェスト（祭り）ですよね。

倉橋　例えば、高齢者の合唱団があるとしますね。これを、石井先生が指導して少しでもうまくする。それを公開の形でやる。そうするとお年寄りで歌わない人たちも、友達が出るからというので聞きに行き、音楽に親しみをもつようになる。何も高齢者の合唱団だけに限らず、吹奏楽団や何かでも公開レッスンをスケジュールに組み込むことも、考えられますね。

小林　西宮の公園に以前、兵庫県彫刻家連盟が、いろんな作品を置いたわけですね。ギリシャ、インド、その他から石を運んできて、そこで地域の彫刻家二〇人ほどが彫刻を始めるわけです。そうすると地域の人たちがその作業をじいっと見にきます。それが地域住民との交流の象徴として現在も並んでます。最近では新宮という町の西播磨文化会館で数人の人が毎年これを展開したわけです。それを文化庁が全国的な企画としてバックアップして、毎年各県で一つやる。兵庫県ではあっちこっちの地方の庁舎に「彫刻のある町」というて彼等の作品を置いてあるわけです。そういう運動の体制が国民文化祭でできたらいいと思うんです。文化というのを、そんなに固定して考えずにね。

石井　そうですよ。文化というのは創意ですからね。大衆の創意を促進させるということが、ものすごく必要ですね。

自分で何かをやろうという気持ちを持たせるということが、一番必要なことだと思うんです。今は世の中便利になって、スイッチを押せばテレビは自分の好きな映像が出てくるし、何でもボタン一つでできるようになっている。自分で考えるという場が非常に少なくなっているんです。自分で考え創意を持った生活をするということが、一番重要だと思うんで、小林先生の話なんか本当にそのとおりだと思いますね。

残された課題

渡辺　国民文化祭のあり方について、いろいろと根本的な問題もご指摘いただきましたが、今後国民文化祭を運営してさらに育てる上で、私どもも参考にさせていただきたいと思います。

最後に言い残したことや、どのようなことを国民文化祭の今後に期待されるか、あるいはどのような夢をお持ちなのか、また、文化庁としてどういう事業をやるべきだというようなご指摘があったら、ひと言ずつお願いしたいと思います。

倉橋　もちろん全県的、全国的に文化祭を充実させることが、第一の課題だと思いますけれども、今度の兵庫県を見ますと、国際交流の分野が入っています。

国際交流で何をどういうふうにしてやるかは、それぞれの県の立場で考えていただくとして、国際交流という問題に目を配ることも、大事だと思いますね。

石井　国民文化祭という場で、外国の様々な文化に接するチャンスを作るということは絶対必要だと思いますね。わが国の文化を大切にするからこそ必要だと思うんですね。音楽について言っても、日本のことだけ考えてやっていては駄目なんですよ。今、世界の音楽はどういう姿で発展しているのか。その中において日本の音楽はどうあるべきであろうかというようなことですね。また日本の音楽の良さを世界に紹介するということも必要です。地球が小さくなりましたので、いつも世界のことを考えながら、われわれは行動しているわけです。国民文化祭にもそのような視点を入れるということは、素晴らしいことだと思います。

小林　国際、国際という言葉がよう出てくるんですけども、他国の人が、どんどんわれわれの日常世界へ入ってきてるわけですね。文化というものは、それぞれ国柄がありますけども、われわれの日常生活を通じて共存しながら成長していけるのではないか。

この国民文化祭を契機にして、神戸などでもそういう人たちがまた新しいものをつくる。国や県・市などの友好的交流も大切だが、国際性というのは、日常的に接触の場を作らないかんということですね。それをもっと拡大する。だから、国民文化祭が済んだあとで、われわれは一遍集まろうやないか、と。これは芸術家だけやなしにいろいろな人に集まってもらう。兵庫県の文化振興をどうしようかという場を、地域ごとに現実的、空間的に場作りをしていく。

それから、全県参加の問題と関連して、国民文化祭の旗を受け渡しする際に、ただ単に前回の開催県から次の県へ受け渡しするだけやなしに、その前の県もみんながそろうて手を握り合うて渡していく。そうするうちに新しいアイデアも出てきますので、この点は大いに考えていただきたいなと思います。

渡辺　国民文化祭というものは国際的な広がりがなければいけない。あるいはこの国民文化祭を契機に恒久的な文化の活動の場を整備すべきであるというような大変重要なご指摘をいただいたわけでございます。これからの日本は、いや応なしに文化でもたざるを得ないといった客観的情勢が生じていると思っておりますが、そういった意味では国民文化祭の重要性は今後ますます増すものと私どもも覚悟をしているわけでございます。まだ若い事業ではございますが、先生方におかれましても、長い目でもってこの国民文化祭をお育ていただき、さらにこれを核として地域、地域に根差した文化を育てていただくきっかけをお作りいただけるように、改めてお願いしたいと思います。本日は、貴重なご意見をありがとうございました。

次号目次

特集　大学教育の充実

巻頭論文

大学教育の課題と展望　下山　瑛二

座談会

大学院の充実と改革を考える

（出席者）戸田　修三／新野幸次郎

蜂須賀養悦／俣野　恒夫

小野田　武／（司会）前畑　安宏

論文

大学の個性化と大学の評価　安原　義仁

韓国における工学教育の新しい試み　曽我　和雄

随想

大学に求められるもの　阿部　正和

報告

アメリカMBAコースの現場から　義本　博司

事例紹介

ファカルティー・ディベロップメントの試み　絹川　正吉

国際化へ対応する人材養成　田代　空

情報化へ対応する工学教育　木村　泉

社会との連携を深める共同研究　石川　允

編集後記

▽この夏は、何やら夏らしからぬうちに過ぎてしまったようだ。九月を迎えた途端に秋風が立ち始めて、このまま本格的な秋へと移りゆく気配が濃厚だ。多くの子どもたちにとっては、楽しみにしていた夏休みに水泳の機会を奪われるなど、うらみも大きいことだろう。しかし、新学期が始まった以上は、心機一転、しっかり勉学にいそしんでもらいたいものだ。

▽さて、秋を迎えると思い出される言葉の一つに「芸術・文化の秋」がある。芸術・文化に触れ、親しむことへことさら季節をうんぬんする必要はないと思うが、ただ、この季節が人間の知的・精神的活動に適した気候だという点では異論がないだろう。

▽今月号は、芸術・文化の秋にちなむものとして「国民文化祭」を特集した。この国民文化祭は、全国のアマチュア文化活動の祭典として今年で第三回目を迎え、一〇月下旬から兵庫県で開催される。開催県の熱心な協力の賜物と言えるが、回を重ねるにつれて〝より多く、より幅広く〟なってきている。今後、ますますの発展を期待したい。

（政策課）

MESC　61　月刊　「文部時報」　9　月　号　第1340号

著作権所有　文部省　昭和63年9月10日　印刷　昭和63年9月10日　発行

発行所　株式会社ぎょうせい

本社　東京都中央区銀座7丁目4番12号（郵便番号　104）

（営業所）東京都新宿区西五軒町52番地（郵便番号　162）

電話　東京（268）2141（代表）

振替口座　東京9－161番

印刷所　株式会社行政学会印刷所

定価　300円　（〒50円）

年間購読料　3600円　（〒共）

・ただし，増大号，臨時号の場合は別に代金を申し受けます

・なお，購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にお願いします